

◆地域活動

ヒトエグサ養殖指導

水産海洋技術センター 大城 信弘

1. 背景・目的

今年度は、今帰仁村古宇利地先での、ヒトエグサのリボン採苗試験を予定していたが、相次ぐ台風により、網張りは行われなかった。

其処で名護市屋我、饒平名地先での羽地漁協組合員の行っているヒトエグサの観察を中心に、伊江漁協のヒトエグサ養殖への取り組み調整を行い、併せて他の漁協の巡回を行った。

2. 方法及び結果

伊江漁協では、此まで養殖に携わっていたメンバーが止め、新たに行うとの事で、養殖技術の継承は行われて無かった。

其処で養殖手法の資料説明と、養殖特区の現場確認を行い、さらに備瀬地先の養殖状況を視察し、現場での説明を受け、9月25日に試験用網を25枚提供した。

伊江島での網張り後の現場確認は出来なかったが、脱水生で約50Kgの収穫を行ったとの事であった。

名護市饒平名地先では、泥汚れが著しく、昨年度はリボン網がテストされていたが、今年度はリボンは使用せず、泥汚れの少ない漁場探しとして、新たに屋我地先での養殖が試みられた。

併せて、一部の網は、リボンを使用し、備瀬地先での種取りが行われた。

網は旧9月1日の大潮前から饒平名地先での張り出しが行われ、継いで旧15日の大潮前に屋我地先で行われた。両区

ともに、直ぐに泥に覆われる状況にあったが、特に饒平名地先は著しかった。

網掃除は時折、刷毛での泥落としが行われたが、泥の付着を防ぐ事は出来ない状況にあった。

しかし今年度の収穫量は、脱水生で約1.5t程度と、昨年度の0.2tから大幅に増加した。網の使用枚数は屋我区が19枚、饒平名区が50枚であった。

金武漁協では、レベルが低く、此までアオノリ等の着生が多かったが、今回は一部陸岸近くに広げられ、雑藻は可なり減ったとの事であった。

3. 考察

今帰仁漁協管内のヒトエグサ養殖開始は昭和44年と古く、運天地先で行われていたが長く中断し、平成15年の特区調整の折、現在の古宇利島地先に設定されたものである。

漁場選定に当たっては、近場で監視出来る漁場をとの要望で、やむを得ずに荒場で面積の取れない現漁場が選定された。

本漁場は、リボンの本来の目的である、汚れ対策としては、必要性が低く、むしろ波浪対策が求められる。

同じく、伊江島での西江前地先は岩場で、汚れは少なく、リボンは必要とされない。しかし、漁場は限られており、今後の量産には、浮泥が多い為に利用されなかった川平地区での養殖も必要とされ、その際にはリボンの効果が期待され

る。

伊江島では、昭和48年に適地選定調査が行われ、その後断続的に養殖が試みられたが、殆ど生産されない状況が続き、技術の継承も行われて無い。その要因の一つに、漁場面積の狭さが考えられ、漁場拡大の工夫が必要とされる。

羽地漁協の増産は、新たに設けた屋我地先での生産に依る処が大きい。屋我地先も汚れは有るものの、今期は手摘みで3回収穫されたのに対し、饒平名地区はせいぜい一回の収穫であった。今後屋我地区では漁場拡大が見込まれる。

リボンは古くに、恩納村漁協の吉浜氏に依って考案されたが、直ぐに行われなくなり、本部町備瀬地先のみで使われ続けて来た。

しかし、材はPP縄が使用され、漁場汚染が問題とされたいきさつが有り、耐久性も低い事から、羽地漁協管内では耐久性に優れたリニアバンド等の使用を勧め、試験的に使用されている。

勿論、リボンを使わずに済む漁場の選定が第一だが、リボンは苗床での種取り・生育初期に必要とされ、本張りには必要無く使用期間は短い。

今期は、リボンを使用している備瀬地先では、80枚の網から手摘みで800Kg弱の収穫であった。この値は、一網当たりの収穫量としてはやや少ないが、波の荒れで藻体が切れる事を考慮すると、ほぼ妥当な値と思われる。

リニアバンド等の耐久性の有る材では、10年以上は使用可能と考えられ、リボン制作の労力が大幅に軽減される。

今後とも、リボンの材質探索や、リニアバンドをPP縄同様に細かく裂く等の対策は必要とされるが、リボンは安定生

産に効果的と考えられる。



図1 12月14日屋我地区の鉄筋追加



図2 12月14日屋我の状況



図3 12月14日饒平名の汚れ状況



図4 3月6日伸子棒での泥落としテス



図7 12月20日備瀬2回目の収穫



図5 備瀬地先のリボン網張りの状況



図8 2月26日金武・中田氏の冷凍保



図6 2月20日備瀬地先の状況



図9 3月17日饒平名の天然ヒトエ